

齋宮恬子をめぐって

福 井 貞 助

一

伊勢齋宮恬子^{ヤサヒ}内親王の名は伊勢物語中に明瞭に出るわけではない。ただ狩使69段の末尾に「齋宮は水尾の御時文徳天皇の御むすめ惟喬の親王の妹」と附記されている。勢語の書名及び成立に甚だ重要な69段を中心とする伊勢国物語については、この齋宮なる人、恬子内親王から考察を進めることとする。

史書に記されたところ、恬子内親王は文徳天皇の皇女、母は紀名虎女の静子であり、惟喬親王と同母である。内親王の歿年は明らかだが生年は知れない。母静子の兄有常は弘仁六年の誕生であるから承和十一年惟喬親王誕生の時二十九才、その妹静子は二十才前後と見るのは妥当である。ただ文徳天皇はこの時十八才ゆえ、恬子は惟喬の妹と見るのが穩当である。勢語69段末尾の「齋宮は」云々の記事は何時何によって書かれたものかは知れぬが、右に合致すると言える。そこで仮に惟喬より二才年下と見て、年譜を左に示そう。

承和十一年 844 惟喬誕生

十三年 846 一才誕生

天安二年	858	一三才	文徳崩三十二(文徳実録)
貞觀元年	859	一四才	伊勢齋宮卜定 入初齋院(三代実録)
三年	861	一六才	入太神宮
十八年	876	三二才	齋宮退之(古今集目錄)
元慶元年	877	三三才	有常卒六十三(三代実録)
四年	880	三五才	業平卒五十六(〃)
寛平九年	897	五二才	惟喬薨五十四(日本紀略)
延喜十三年	913	六八才	薨(西宮記)

恬子について知れる確実なものはこれ以外にはない様である。

伊勢物語には69段に次の如くある。

昔、男ありけり。その男伊勢国に狩の使にいきけるに、かの伊勢の齋宮なりける人の親、常の使よりはこの人よくいたはれ、と言ひやれりければ、親の言なりければ、いとねんごろにいたはりけり。あしたには狩に出だし立ててやり、ゆふさはりは帰りつつ、そこに来させけり。かくてねんごろにいたづきけり。二日といふ夜、男、われてあはん、といふ。女もはた、いとあはじとも思へらず。されど、人目しげければ、えあはず。使ぎねとある人なれば遠くも宿さず。女のねや近くありければ、女人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに來たりけり。男はたねられざりければ、外の方を見出してふせるに、月のおぼろなるに、小さきわらはを先に立てて、人立てり。男いとうれしくて、わがぬる所にゐて入りて、子一つより丑三つまであるに、まだなにことも語らはぬに帰りにけり。男、い

と悲しくて、ねずなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もとなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより、詞はなくて、

君やこしわれやゆきけんおもほえず夢かうつつかねてかさめてか

男、いといたうなきてよめる、

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとはこよひ定めよ

とよみやりて、狩に出でぬ。野にありけど、心はそらにて、こよひだに人しづめて、いととくあはんと思ふに、国守、斎宮の頭かけたる、狩の使ありとききて、よひとよ、酒のみしければ、もはらあひごともえせで、明けば尾張の国へ立ちなんとすれば、男も人知れず血のなみだをながせど、えあはず、夜やうやう明けなんとするほどに、女方よりいだすさかつきの皿に、歌をかきて出したり。とりて見れば、

かちち人の渡れどぬれぬえにしあれば

とかきて、末はなし。その杯の皿に、ついまつのすみして、歌の末をかきつぐ、

またあふさかの関はこえなん

とて、明くれば屋張の国へ越えにけり。斎宮は水尾の御時、文徳天皇の御むすめ、惟喬の親王の妹。

(天福本による)

この全文によれば恬子が斎宮の時、男、つまり業平と恋におちた事になる。末尾の注めいた文がなくとも、この斎宮は男、つまり業平の親族であり、恬子であろうと推される。「斎宮なりける人」が斎宮その人である事はここでは問題は無い。但し伊勢物語は史書をそのまま記した事でも、逸事をそのまま伝えた実記でもない。作為潤色の創作物である。従ってここに示された事は、果して恬子自身に関する事かどうかは他の資料によらなくてはならない。古今集

の詞書は伝記資料としても有力なものが多く、勅撰集だけに物語と異なって、たしかな事を伝えるが、恬子の場合一応次のものが目に止まる。すなわち勢語69段と同じ贈答歌が古今集卷十三に見え、詞書が附されている。

業平の朝臣の、伊勢国にまかりたりける時、斎宮なりける人にとみそかにあひて、

またの朝に人やるすべなくて思ひをりける間に、女の許よりをこせたりける、詠人しらす

君や来し我やゆきけむ思ほえずゆめかうつつかねてかさめてか

返し

業平朝臣

かきくらす心の闇にまどひにきゆめうつとはよ人さだめよ

勿論業平と恬子との贈答であるとは何ら示されていない。女は「斎宮なりける人」である。思うに業平が斎宮と交渉があったとすれば、当の斎宮の何人たるかは、ごく限定される筈である。しかも斎宮と男が恋仲になるとか相逢うとかいう事は当然許されるものではなく、公になれば何等かの処置がとられなくてはならぬ。しかし恬子は無事その務を果している。しかも古今集成成立の頃は恬子はまだ生存していたのである。古今集の詞書は虚偽を伝え、而も世人もそれを容認したと見なければ納まりのつかぬ事になるが、かかる大事に関わる事を、しかも当事者の生存中に、つくり事としての詞書が附される事がありうるだろうか。この点松尾聰博士は「斎宮なりける人」とは斎宮その人を意味するのではなく、斎宮に仕えていた女とされるような書きぶりをしたのであり、そうする事によりぼかしている、と解して居られるが、相当うなずける御説である。又、「人やるすべなくて」などとするのは、どう見ても斎宮を意味する様には表現されていない様である。斎宮本人ならその様に、又斎宮に仕える人ならばそれと判然とする様に記せばよいところを、こういった表現をとる事自体、その底に何物かが介在していると思いたいのである。考えうる事は、第一に業平恬子の恋の事は実際あったと噂されていたが、別に表沙汰になった訳ではない。第二に事の実否は

ともかく、業平の歌であまりにも高名になっていた事、第三に業平の創作物—つまり業平集、日記、あるいは伊勢物語そのもの等—でかなり人々の目にふれていたものの存在による、等である。この中第一は否定してもよい。というのは表面にはあらわれずとも噂されているものを、年月もさほどへだたらぬ頃、わざわざ暴露する様な形で、公的な勅撰集に書き記す筈もない。つまり本来全く無根の事であり、むしろ第二、第三の場合の様に、業平の歌にまつわりついた創作的な所産で、噂ありとすれば、こういう文芸より生じたものと見るのが至当である。二条後の場合、古今では業平との交渉の事を、そしらぬふりをしてまぎらはし隠したような形になっているのとは対照的である。二条后諸段が勢語中に数多く展開したのに反し、斎宮物語はさしたる展開もなかったのは、事実をふまえたか、全くの仮作かの本質的な相違による点がある様に思われる。

こう見たところ、伊勢斎宮物語の原型は、古今以前に成立していた、という風に考えられる。それが伊勢物語なる書名をえていたか、あるいはそれほどの形をとっていなかったものかはわからぬが、少なくともある種の原型が古今以前という古い時期からあったとすれば、伊勢物語なる書名の由来もおぼろげながら、これに関係する所が多い様に思われるのである。そこで一つの臆測が浮ぶ。つまり、伊勢物語の書名は本来69段が巻頭にあったことに由来するというのではなく、もともと業平の、伊勢斎宮との空想的歌物語が重きを占めていた業平集の如きものに附せられたものであったが、その原体が古今集等によって一段と創作が加えられ、二条后物語群などの拡大をはじめとして増大し、生長したのではあるまいか、というものである。

二

業平と斎宮との事は、十三世紀初に成った古事談に、

高家者業平之末葉也、業平朝臣為勅使参向伊勢之時、密通齋宮云々、懷妊生男子、依有露頭之怖、令撰津守高階茂範為子、師尚是也、世隱秘不議之云々

と見えている如く、齋宮所生の業平の子師尚は、高階茂範が子としたのであって、高階家の子孫はこの師尚の流である、と伝えられている。この伝説はもっと溯れば、十二世紀初には成立した江家次第に、

中将与齋宮密通、令生師尚真人、仍高家于今不参伊勢、……………

と出ている。この江家次第には后宮出事事に関し、五条后原野行啓より同車の二条后の事に及び、業平は二条后との事のため奥州に放浪して小野小町の戸に逢う事、及び業平齋宮密通の事という注目すべき逸事をあげており、在五中将にまつわる所伝がつけ加えられた形になっている。この業平と齋宮との事に関する伝説らしきものは、更に百年溯って見うける事が出来る。高階家の系図では師尚の孫良臣の子が高二位高階成忠であり、その女は藤原道隆の室で一条皇后定子を生んでいる。十一世紀初頭寛弘八年一条帝讓位に当り、皇統を定子所生皇子に伝えるか、彰子所生第二皇子に伝うべきかについて問題が生じた。その際の事を行成は権記に次の如く書きのこしている。行成は、「此皇子事所思食歎尤可然、抑忠仁公寛大長者也、昔水尾天皇者文徳天皇第四子也、天皇愛姬紀氏所産第一皇子、依其母愛亦被優寵、帝有以正嫡令嗣皇統之志、然而第四皇子以外祖父忠仁公朝家重臣之故、遂得為儲貳、今左大臣者亦当今重臣外戚其人也、以外孫第二皇子定応欲為儲宮、尤可然也、」と奏上する。すなわち文徳皇子惟喬惟仁両親王の皇太子問題に関し、外戚の重臣たる故を以て惟仁親王が立てられた例に倣い、此度も外戚道長を重んじて彰子所生第二皇子を立てるをよろしとする意見である。そしてもし定子腹皇子を立てんとすれば大臣達は必ずしも承知せず、徒に混乱を招き帝を悩まし奉る事であろうと言ひ、仁明天皇は老年に及んで帝位につかれ、恒貞親王ははじめ皇太子たりしも皇統を継ぎえなかつたという例の如く、帝位の将来は人力の及ぶところではない。ただ宗廟社稷之神に任すべき

であると断言をさけた如く述べ、続けて「但皇后宮外戚高氏之先、依齋宮事為其後胤之者、皆以不和也、今為皇子非無所怖、能可被祈謝太神宮也」と記している。すなわち帝位は神慮によるけれども、定子の父は高階成忠で、その先は業平、齋宮の子という師尚であるから、敦康親王にとってははばかる所がある。よくよく太神宮に謝し申すべきである、と言って暗に敦康親王の不利をほめかしているのである。これを見るに業平齋宮の物語は寛弘の頃既に単なる仮空譚ではなく、かなり事実視された取扱われ方がされている事が知れる。一体この皇太子問題に関して典拠となっているのは忠仁公時代惟喬惟仁の事であり、定子所生第一皇子の血統について指摘している難点は、業平齋宮の故事である。共に勢語に深い関係を持つものであるが、勢語では前者については惟喬の落漠たる生活をえがくも明らかに史以上の事件にはふれず、後者については業平らしい男とその親族らしい齋宮との漂渺たる恋のみをえがいている。しかし宮廷人の知識が正史記録以外の事に及び、それが相当の重視を伴っているのを見れば、寛弘の頃、古今や勢語も単に詞文賞翫のものとしてではなく、古典としての重みを持ち、解釈が加えられていたと言って差支えない。古今の「齋宮なる人」が恬子その人であるとの解釈や、勢語69段の末文は寛弘以前に成立していたと見るのがむしろ妥当のようである。現に十世紀後半の成立とおぼしき古今六帖には、「君やこし」の歌の作者を読人しらずとも齋宮なりける人ともせず、齋宮と決めて記しているのである。

勿論、業平齋宮の情事は動かし難い史実としてうけとられていたわけではない様である。行成の記す所を見ても、あいまいさは窺える様である。定子所生敦康親王が師尚の血をひくという事は、この親王の外戚が威力あった時には問題にされず、齋宮の事は虚事也と却けられたであらう。しかし敦康親王が押しつけられるべき弱勢にある時には弱々しい不明瞭な伝えも俄然力をえて台頭する、又台頭させる事によって不利化を計る事になる。そして一旦この齋宮の情事が意味ありげに、大事に関して持ち上げられたとすれば、故事をめぐる噂はむしろ真実めいて来る。

前述の如く江次第、古事談はそれぞれに高家の血統について齋宮の事を明瞭な形で記している。これらはそれが、も早問題視されぬ遠い昔の事になったと共に、説話として固着した結果である。

史上齋宮又は齋院が情事によって交替させられた例に属するものは多少見えている。文徳実録天安元年（八五七）二月の条下に「丙申癸鴨齋内親王慧子、更立无品述子内親王為齋内親王、遣右大臣正三位藤原朝臣良相於神社告事由、其事秘者世無知之也。」とあるが、これは古今集卷十七にも見えている、

田村の御時に齋院に侍りける慧子の内親王を、母過ありといひて

齋院をかへられむとしけるを、そのことやみにければよめる、 尼敬信

おほ空をてりゆく月しきよければ雲かくせども光けなくに

とあるものらしい。古今では齋院交替は沙汰止になった様に記されているが、しかし文徳実録によれば、この事は秘密裡に行われ一応世人の眼からのがれた形にした様である。慧子の母は文徳女御列子であり、この母の過ちによって齋院を替えさせられたのであり、当人の事によるわけではない。しかも極秘裡に処理される。まして在任中の齋宮自身に關した事であればゆゆしき大事である。それだけに業平齋宮の物語は、神秘的な気すらおびて業平を飾り立てるものとなり、69段は、理想化された恋物語の典型となつて行くのである。

平安中期に至ると荒三位と言われた道雅と三条院内親王当子との事がある。長和五年（一〇一六）齋宮当子帰京後道雅が通う様になり、世評に上る様になった。栄花物語玉の村菊巻には、

まことそらごと、知りがたき御ことなれど、世にかくもり聞えたるに、院の御気色のいとみじきなり。かの在五中将の「心のやみにまどひにき夢うつつとは世人さだめよ」などよみたりしも、かやうのことぞかし。それはまだまことの齋宮にておはせしをりのことなり。されどこれぞ、前の齋宮と聞えさすれば、あながちに恐しかるべきこ

ともあらねど、院のいときはただけく思しのたまはするが、いとかたはらいたきになん。

と見えている。こういう場合にも在中将の物語が引き合いに出されており、前記権記との記事と並んで平安中期、斎宮物語はこんな風に信奉されつつこの種の典範的な位置を獲得しつつあったのである。応徳三年に成った後拾遺集には卷十三恋三に道雅のその折によんだ歌が見え、詞書に、

伊勢の斎宮わたりよりまかり上りて侍りける人に忍びて通ひける事を、おほやけもきこし召してまもりめなとつけさせ給ひて、忍びにも通はずなりにければよみ侍りける、

と記されている。この行文には伊勢物語の、二条后段の恋路の閑守物語のつかいさえ通っているように思われる。こえがたい閑をこえて逢わんとする情熱と、別離の悲哀は伊勢物語の主題に外ならず、斎宮物語も二条物語も重なり合つて息ついていると言えるだろう。

今鏡は嘉応二年（一一七〇）の成立と考えられているから、右の行成の記録の時から一六〇年近く後の執筆となる。

この中「藤波の上 第四」に次の如き記事がある。これは陽明門院禎子の皇女について述べているものである。

良子の内親王とて、長元九年十一月二十八日伊勢の斎宮と聞えさせ給へりし、一品にのほらせ給へりき。次の姫宮は娟子の内親王と申しき。長元九年十一月のころ、賀茂の斎院と聞えしほどに、まかり出で給ひける後、天喜五年などにやありけむ、九月のころ、いづこともなく失せさせ給ひにければ、宮の内の人、いかにすべしといふともなくして、明し暮しけるほどに、三条わたりなる所に住み給ひけり。初めは人の扇に一文字を男の書き給へりけるを、女の書き添へ給へりければ、男また見て、一文字添へ給ふに、互に添へ給ひけるほどに、歌一つに書き果て給ひにけるより、心通ひ給ひて、「夢かうつつか」なる事どもいで来て、心や合はせ給へりけむ、負ひ出だし奉りて、やがてさて住み給ひけり。男咎あるべしなど聞えけれど、人がらの品も身の才などもおほして、世も許し聞ゆ

るばかりなりけるにや、もろともに心を合はせ給へればにやありけむ、さてこそすみ果て給ひけれ。男そのほどは宰相の中將など申しけるとかや、後には右の大臣までなり給へりき。

この男は具平親王の孫、源師房の子俊房であるが、同じく今鏡「村上の源氏 第七」に、

また大臣殿の齋院を取りすゑ給へりしかばにや、御末の官昇り難くおはすると申す人もあるとかや。九条殿の北の方の宮も、便なき事なれど、それはただ宮ばかりにおはしき。これは齋院に居給へる人をこめすゑ給へりし、たぐひなくや。業平の中將も「夢か現か」の事にてやみにけり。道雅の三位も「木綿しでかけし古に」などいひて、忍びたる事にこそ侍りけれ、これはぬすみ出してとりすゑ給へれど、これは業平の中將には変りて、前のなればさまで過りならずやあらむ。

と述べている。事件のあつた天喜五年（一〇五八）は道雅の事件から四十七年ほどしか経っていない。噂が人口に上つた時、人々は道雅をあげ、業平を引き出したにちがいない。今鏡作者はこれらを並べ出して感想を記して居り、その文章にも又勢語を思わせるふしぶしが窺える様である。

ともあれこの種の事件は、そうざらにある事ではない。平安朝廷人たちは量り知れぬ興味と愛著をもつて勢語に彩色された齋宮の恋の世界をうけとめていた。不祥事の血が現在もある家に伝えられているという。その恋の異常さは語り草ではあるが、それにもまして69段にくりひろげられた情景は秘事にふさわしく夢幻漂渺とした趣のものだったのである。その歌は又、人々の脳裏にやきついて伝えられるに十分であつた。そうすると、伊勢物語の書名の由来を自然この齋宮物語に結びつけて納得する向が多いにちがいない。だが同時に前に考察した二条后物語という一群が大きく広がっている状況なのに、齋宮物語にだけ注視するのでは、つきつめて考えれば不可解となるだろう。だから合理的な落着を見せようとする場合齋宮段を初段に置く本を重んじたり、伊勢御編纂説を強調したりしたわけであ

る。一体二条后段では本文中に二条后事という明示は稀薄なのであり、一部の所謂後人の注を除いては、誰しれぬ女とぼかされている。斎宮も又誰それであるかの明示は薄いと言えるが、斎宮である事は明らかにされ、それだけの限定だけでも、単に某女との事という以上に特定人に関わる、特異な恋の物語となり、又それが結ばれざる間柄のはげしく且はかない恋としての極点をなす様なものである。そういう意味で松尾博士の説の如く、最も困難な恋をえがいたものである。そしてこの原型の匂い行くところ、自ずから二条后物語群を包摂するのであり、更にその余波的な小章段の恋物語へとつながって、恋の歌物語勢語は仕組まれていると言える。だから後拾遺の道雅や、今鏡の斎宮譚に、二条后段を思わせる様な表現が見られるのも、結局は恋物語としてはそれほど異質のものではないからである。前記江家次第の業平に関して記した条に、業平逸話を東国下りを含めた二条后譚に、斎宮との事件を並立させた様な形であげているのも、業平伝承がこの様な要約的な形で把握され易かった事を示している。そして教長の古今集註に、

業平コノツカヒニマイリテ、斎宮ヲムカシタテマツリテ、カク詠カハセリ。カノミヤモハシヂカナルヲホン心ニヤアリケム。コノスキモノ業平ニアヒタマヒニケレバ、ヨニキコエテ、ソノミヤヲバ、ヲロサレニケリ、業平ハミチノ国ヘナガシツカハシケリ。ソノユクミチニテモ、ヲンナノアルトコロニハスキアヒ、哥ヨミカハシナンドシケルコトヲ、カキツヅケタルヲ、イセモノガタリトイフ。コノイセノコトニヨリテ、ミチノ国マデモイタリケレド、ヲコリヲムモヒテ、イセモノガタリトナヅケムリトナム。

という記事が見える。現存勢語によれば二条后との事によって、業平は東国下りをした形になるが、そうではなく右の如き説が立てられるのは、本来斎宮段を冒頭におく本に依拠したためというよりも、むしろ内容的にそういう受けとり方がされ易いほど、業平の恋物語として、両系の章段群は、対立ではなく類同の形成をたどったものであったからである。ここでは書名説はあくまで斎宮段に基づいてたてられている。^(注二)それを主張するには、伊勢物語の本文

の形式ではなく、内容から背後を考察して行く方法に由るらしい。だから逆に、こういう説の生ずる十二世紀あたりは69段を冒頭に置く本が重視される素地があった、とも言えるのである。

三

二条后物語群と斎宮物語群とは、現存伊勢物語を支える双柱の如き観を呈する。二条后物語群については既に論じ(注三)た。斎宮諸段群が二条后段の一連及び東下りと相似た配列になっているものも以前より言及して来た如くである。すなわち二条后物語が三段の「ひじきも」の段から「月やあらぬ」の段、「閑守」の段、「芥川」の段をへて東下り諸段に及ぶ如く、斎宮段を中心に前部に摂津和泉旅行諸段、後部に伊勢国関係もしくは69段の同趣発展の諸段が並べられているのである。更に二条后後が処々に散在するのに応ずるが如く、102、104段に斎宮関係なる事を示す末文を有するものがある。これらを対比すると、斎宮段群に倣って配列、注記附加の構成が試みられたものと思われるが、成立の段階を明示する事は出来難い。しかしこのような両群の形成には、他段とは異なった親密な関連が考えられるのである。特に66、75という斎宮物語群は、その前後に、65、76という二条后章段でかこまれている。65段は在原なりける男とおほやけおぼして使ひ給ふ女との悲恋物語で、古歌などとり集めた作爲の頭わな物語だが、業平二条后の物語とは末尾の注めいた文を見なくとも、すぐ判るものである。76段は、「昔二条の後のまだ春宮の御息所と申しける時、……」と書き出されているのによって明らか通り、二条后大原野行啓時業平が往事を回想する様な歌を贈った物語で、伊勢物語初部の二条后段に対応するものである。ところで65段の前の63段は、在五中将と名を出された男に対する老女の恋の物語で、これも虚構味の強いものだが、少なくとも現存本では、63段から69段へと、業平の名を頭わにしつつ虚構性の濃い恋物語をつらねて斎宮段群をせり出し、その後76段から実録性の匂いの強い諸段の連鎖

へと移って行く形になっている。齋宮段群の位置は現存本ではこの物語のほぼ中央である。だから前半部と後半部の接合部とも、又はこの中央部を頂点として前半部後半部と裾を引いている形になっているとも見うるのである。そして二条后段の二章段が、それぞれ左右からこの齋宮段を支える支柱の様になっているのである。

二条后段につづく東国諸段群、と齋宮段群との段群構成の類似もしくは関連は、改めて言うまでもないが、二三言及して置こう。齋宮段の66と68段は東国諸段の7、8段に相当するものだが、「津の国にする所ありけるに」(66)とか、「思ふどちかいつらねて」(67)とか、「とよめりければみな人よまずなりにけり」(68)とか、これらは東下り段の真似事らしい点が多すぎる。諸本における章段の浮動性も両者相似たものがある。主要段、例えば東国諸段では9段の次に東国の恋物語が続くのも、齋宮諸段では、主部69段に伊勢国恋物語が続いているのと類似している。そして二条后段群は大きく東国諸段を含め、二条后との恋から東国放浪、東国での恋物語と形づくられているのに対し、齋宮諸段でも69段の齋宮との恋とこれに続く伊勢国での他の女と恋物語という形になっているのは、やはり相似たものである。ところが二条后段には右に見た65、76という特徴的な二段がある。前者は4、5、6段の二条后物語を大きくとりまとめて作爲された形の章段である。二条后との恋物語の主題はここに繰り返されて、別個にとび離れて長章段を形成している。後者は伊勢物語初部の二条后段に対応する回想的内容の章段ととれる。これらと似たものが齋宮諸段の中に見出せるかどうか、検討して見よう。まず後者に対応するものとしては104段がある。

昔、異なることなく尼になれる人ありけり。かたちをやつしたけれど、ものやゆかしかりけん、賀茂の祭見に出でたりけるを、男、歌よみてやる、

世をうみのあまとし人の見るからにめくはせよともたのまるかな

これは齋宮のものと見給ひける事に、かく聞えたりければ、見さして帰り給ひにけりとなん。

とあって、たとい「これは……」以下を後の附加と見ても、内容的に、二条后物語中の76段に似た、往事を匂わせる歌を車中の人によみやる物語である。このように104段は、斎宮段群とは別の位置にあるのも、76段と似た配慮がなされ、もしくは構成されたものと言えるだろう。

次に前者について見よう。斎宮段70と75の一群は、伊勢になる語を出だすもの四段、73、74の二段はただ男女の物語で、共に万葉集に類歌の見出せる歌によって構成されている。この事は巻末部にある、115、116段の、東国諸段(二条后段に続く一連)に続くべく予定されたらしい章段が、いずれも古今集の小町の歌、万葉集の古歌によって作為されているのを見ても、又一部の本にのみある短章段が、多くその種の歌によって作為されているのを見ても、まず逐次追加されたもので比較的遅い成立のものであろう。ところで70と75段の一群は伊勢なる地名、乃至は斎宮に關した章段を集めたというよりも、「逢い難い女」を主題とする章段の類聚である。70段は「狩の使より滞り来けるに、大淀のわたりに宿りて、斎宮のわらはべに言ひかけ」たのであり、71段は伊勢の斎宮に、内の御使にてまゐって、「かの宮にすぎこといひける女」と歌の贈答をしているのであり、神の忌垣をこえるとか、こえて見よとか、斎宮にかけたやりとりがあり、72段では男は女に逢った後、「伊勢の国なりける女、またえあはで隣の国へ行くといみじう恨みければ」とあって、女の恨みの歌がある。そして73段に至って、この男女物語では、「そこにはありと聞けど、消息をだにいふべくもあらぬ女のあたりを思」って、月中の桂の如き叶わぬ恋の相手だと歎き、74段では思うに任せず、逢えぬ日多く恋い渡る男の歎きの歌がある。更に75段では、「昔、男、伊勢国にゐて行きあらんといひければ、女」とはじまり、四首の歌を連ねているが、第一首の他は伊勢国もしくは斎宮には關係のない歌であり、このように、「男」「女」「また男」という語をはさんで歌を連ねる形式は、大体歌の附加増益の所為の可能性の多いものである。最後に置かれた詞は、「世にあふことかたき女になん」の評語である。

こう見たところ、73段あたりから専ら伊勢国物語を離れ、困難な恋の主題に移行しつつあるわけで、伊勢国の事と困難な恋とは、要するに69段の内容をあつまりまとめて見ればこうなってしまうのである。つまり伊勢国物語を連ねるといっても自ずから限界があり、茫漠とした東国に材をとった東国物語のような多様さは出しにくく、引き用いるに適當な古歌も少ない。せいぜい大徒などをよみ込んだ歌を集める程度である。むしろ69段の内容の繰り返しである、逢い難い恋の物語をつらねる方に移行する。73、74段の伊勢国に關係のない男女の物語、あるいは75段の、歌の追加から難き恋の歌物語への形成という過程は、それが伊勢国物語の連鎖から発展的に69段の主題に倣った小章段の形成に向っている事を示す様である。そうすると斎宮関係段では、二条后段が、古今集の歌や詞書からその成立の古さを推せる4、5段から発展して、諸古歌を集めて構成された65段という長章段へと展開しているのと一応は似て、69段の着想をとった諸段が形成されてはいるが、それらは又二条后段の場合と異なつた様相を示すのである。

このように二条后段物語群と斎宮物語群とは、その章段構成もしくは段序構成の傾向において、甚だ相似たものがある。それぞれの群の軸になっているものから展開された結合される諸話には、それが恋物語として構成される限り、より抽象化されるものに向う場合同一の、つまり逢い難き恋という線において似通つたものになつて行く傾きがある。だから現存本で二条后段群に継続包含される東国物語を大きく引き出した場合、これを斎宮物語に関連つけてしまふ解釈も容易に生ずるものである。しかしながら、両物語群を対比した場合、このような形成における類同相關の傾向の底には、対立する根本的差異、もしくは発展的融合の試みの跡を見うるのである。

少なくとも両群において、古今集の歌詞書等により、在原業平の歌もしくは事蹟に属すると伝えられるものと緊密な関連にある章段が、その原型が伊勢物語中の、より古き成立もしくは核となつたものであり、他者の歌、古歌等を自在に採つて形成された章段が、右の随從的な形成をなすものと考えられる限り、二条后物語は4、5段より6段へ、

更に東国物語への線を持しつつ65段へと発展したと見られる。そして更に業平の実作を粉飾した76段の如きを配して全体を固めている。これに対し斎宮物語群は、まず69段より、これといきさかの関連を示した短小な、作為性の濃い同趣反覆の章段へと向い、104段のような後日物語を附している。形は似ているが、両群の増益構成の方向は全く異なるのである。二条后物語は核となる章段より発展的形成がある。斎宮段群は69段自体の構築のみ光り、章段群の形成は微弱で蛇足的である。前者は業平の歌や伝承を基として、伊勢物語中に作り上げられて行ったものであり、後者は業平の歌と伝承がそのまま一話を形成し、それ以上に発展的につくり上げられず、多少の類似関連を持ったものを綴ったものである。だから章段群の方法は前者すなわち二条后物語段によって掩われている。斎宮段群が二条后段群に倣ったようなふしの多いのもそのためである。

このような観点から両物語群を、その成立の初期に溯って洗い流して見るとしたら、二条后物語群は四散して散漫となり、業平の歌によって示される諸場面が輝きを止めるのみで、斎宮物語群は、業平と斎宮との恋の次第の物語だが、はつきりと残るといふ事になりそうであると考えられる。

注一 松尾聡著「伊勢物語」アネテ文庫

注二 ここに示される伊勢物語書名説は教長の創案や誤った見解ではなく、恐らく当時の通説の一であろう。

注三 拙稿「二条后の物語の方法」弘前大学人文社会第三〇号国語国文学篇IV